試着接客場面におけるＦ陣形

―チェックマーク型配列の発見，あるいはアクターとして鏡をとらえること―

堀田 裕子
摂南大学
yuko.hotta@setsunan.ac.jp

F-formation in the Fitting and Customer Service Scene

: Discovering Checkmarked Arrangement, or Taking Mirrors as Actors

HOTTA Yuko
Setsunan University

Key Words: Trying-on, F-formation, Mirror, Video Ethnography, Actor Network Theory (ANT)

概要

2 人以上の人間が共通の課題をおこなう際，空間内にその課題を達成するに適した位置を取る．その位置取りを「F 陣形」（F-formation）と言う．2 人の場合，対面配列，隣接配列，L 字配列などのヴァリエーションがあり，場面特有のさまざまな配列についても研究されてきているが，試着接客場面においては，鏡を介した独自の位置取りである「チェックマーク型配列」（checkmarked arrangement）を見出すことができる．

鏡は試着接客場面を特徴づける一つの重要な資源であるが，鏡を含む客と店員の相互行為を分析していくと，鏡を一つの「アクター」（actor）として捉える可能性とその有効性を見出すことができる．「チェックマーク型配列」だけでなく，客がひとりで鏡と対面する場合にも，鏡は一つのアクターとして，試着行動の連関をつくり上げていると考えられる．

こうした作業を通じて，本稿では，ビデオ・エスノグラフィーを通じて，エスノメソドロジーとアクターネットワーク理論との接続を試みるものでもある．

１．はじめに

筆者は現在，衣料品店における人びとの振る舞い，具体的には，衣服が着られている様子や客と店員との間で交わされる会話などを詳細に記述し分析するという，試着接客場面の相互行為分析をおこなっている（堀田 2021; 堀田 2023）．その背後には，装うという社会的活動の意味を問うという問題関心がある．本稿もそうした関心の延長上にあるのだが，本稿ではとくに試着中の客と店員の位置取りに着目し，それが試着接客という活動とどの

ように関連しているのかを考察したい．

位置取りに関する研究に際しては，A.ケンドンの「F 陣形」（F-formation）の議論から出発する必要があろう．F 陣形については，日常会話場面のみならず，鑑賞場面やレクチャー場面などについては検討されてきており，近年では人間がおこなってきた活動に AI が参与する場面についての研究も進んでいる．だが，試着接客場面については研究されていない．身体を装う場面での F 陣形には，他の相互行為場面とは異なる大きな特徴がある．客が身体に着用する装飾品（衣服，靴，眼鏡，ウィッグなど）を販売する店舗，および，客の身体的外見に変化をもたらすサービスを提供する店舗（床屋や美容院，ビューティーサロンなど）には必ず鏡が用意されており，それを直接的／間接的に利用して接客がおこなわれるのである．

F 陣形を考える際には，もっぱら参与者の位置取りそのものに着目されてきた傾向がある．しかし，鏡は明らかにそれがあるからこそのF陣形を可能にしている．それどころか，試着接客場面や美容院でのスタイリング場面などでは，客と店員とがしばしば鏡の中で対面する（facing）のであり，その意味では，鏡はこのF陣形の中に「埋め込まれている」と言いうる．したがって，鏡の位置を含めたF陣形を考察することには大きな意義があると考えられ，また，F陣形研究に新たな視点を投じうる可能性もあるだろう．

次章では，まずF陣形に関する議論を整理し，第3章では堀田（2023）で扱ったデータについて再考しつつ，試着接客場面におけるF陣形システムを考えるうえでの鏡の重要性について述べる．第4章では，鏡を利用した試着接客場面に特徴的なF陣形について考察する．そして，第5章では，相互行為分析の際に鏡を一つの「アクター」として考えることの是非について，B.ラトゥールのアクターネットワーク理論における身体およびアクターの定義を援用しながら考察していく．

２．「Ｆ陣形」をめぐる諸議論

E.ゴッフマンは，対面的相互行為を「焦点の定まらない相互行為」（unfocused interaction）と「焦点の定まった相互行為」（focused interaction）に区分し，後者が生起する社会組織の自然な構成単位を「出会い」（encounter）と名づけた．「出会い」は「状況にかかわりのある活動システム」（situated activity system）（Goffman 1961＝1985: ii）であると述べられており，ここに状況と活動との不可分性，すなわち，相互反映性（reflexivity）が示唆されている．その考え方の根底には，複数の人びとが集まった状態を「社会集団」としてとらえることで取りこぼされてしまうものがあるという問題意識がある．「われわれ」はあらかじめ「在る」ものではなく，相互行為のなかで「われわれ」として在るようになるのであり，そうした一体感や協働感覚をもたらす「社会的配置」（social arrangement）（Goffman 1961＝1985: 4）の生成を問うことには大きな意義がある．

2 人以上の人間が共通の活動をおこなう場面において，人びとはさまざまな配置を成す．たとえば，カードゲームをする時は対面に，勉強を教える／教わる時は横並びといった具

合に，である．また，ひとりが画面を見ておりもうひとりがその人物と画面を交互に見るような位置取りもありうるだろう．これらの位置取りのことをA.ケンドンは「F陣形」（F-formation）と呼んだ（Kendon 1990）．「F-formation」は「facing-formation」「face-formation」とも呼ばれうるため（Kendon 1990: 249），対面時の位置取りの意と理解できる．ただし，F陣形は，顔の向きではなく，下半身の向きで配置が決まる（Kendon 1990: 211）．もちろん，正立していれば下半身と顔の指向性はほぼ一致しているのだが，顔だけ横を向いたり上半身だけ後ろを向いたりして「身体ねじり」（body torque）（Schegloff 1998）の状態になることもある．また，正面を向いていても，目線は眼前ではなく遠くに向いていることもある．

ケンドンは，2者のF陣形には，対面，横並び，L字型の3つの配列があると指摘している（Kendon 1990）．対面配列（vis-à-vis arrangement）は立ち話のように路上で，L字配列（L-shaped arrangement）は比較的開かれた場所で，隣接配列（side-by-side arrangement）は窓際や壁際といった部屋の端で見られることが一般的であるというように（Kendon 1990: 214），配列は物理的空間によって影響を受ける．また，競争的なペアは互いの行動を監視や威嚇ができることから対面配列を，協力的なペアはL字配列を，親密な異性同士のペアは身体的接触も可能であることから隣接配列を好む傾向があるというように（Kendon 1990: 215），参与者の関係性によっても影響を受ける．このように，行為者たちが同じ活動に従事する際は，自分たちの眼前に広がる「操作領域」（transactional segment）を重ね合わせるような配列になるのだが，逆に，別々の活動に従事する際は，互いの操作領域が重ならないような配列になる．また，3者以上の場合には，直線配列，半円形配列，長方形配列も見られるが，3者以上の隣接配列はF陣形として維持される可能性が低くなる（Kendon 1990: 213）．

参与者の操作領域が重なり合ってできる共同の操作空間は「O空間」（o-space）と呼ばれている．O空間が生じる時はつねにF陣形が形成されていることになる．O空間の周りには，参与者の身体が占める比較的狭い空間である「P空間」（p-space）があり，その外側には「R空間」（r-space）が拡がっている．「R空間」についてはあまり明確に定義されていないが，F陣形システムを保護するいわば「緩衝材」であり，来訪者が参入の挨拶をするフロントホールや応接室のようなものとして機能する，と考えられている（Kendon 1990: 233-4）．

以上のようなケンドンのF陣形の議論を発展させたのが，D.マクニールである．マクニールは，多人数での会議場面において参与者同士が対面し話し合う場合と，プロジェクタースクリーンなどを見ながら話し合う場合とでは，目線の移動の仕方や会話レベルに違いが生じることを見出した．そして，前者のような場合を「ケンドンのオリジナル版」として「社会的F陣形」（social F-formation）と再定義したうえで，後者のような場合を「道具的F陣形」（instrumental F-formation）と名づけた．「道具的F陣形」とは，「2人以上の人が空間内の共通の出来事や対象を見つめる」（McNeill 2005: 13）F陣形であり，事物がF陣形

および相互行為に及ぼす影響力を示しているだけでなく，F 陣形を扱う際に事物を含めて考える必要性を示唆する重要な概念であると筆者は考えている. ただし, マクニール(2005)の分析の焦点は主に目線と会話レベルにあり，「道具的 F 陣形」そのものの配列や事物と身体との関係性などは検討されていない.

F 陣形に関しては，近年，とくに人工知能（AI）やロボットを含むコミュニケーション研究の文脈で多く扱われてきている（たとえば，Yousuf, Kobayashi, Kuno, Yamazaki, K. and Yamazaki A. 2012; 小林・氷見・仲地・片上 2012; 牧野・古山・坊農 2015; 塚本・角所・飯山・西口 2017）．日常的な相互行為場面における F 陣形については，広場における複数人の配列を分析し馬蹄型配列などを見出した伝の研究（Den 2018）や，YouTube 上の料理動画から, 料理に特徴的な Z 配列や逆 L 字配列などを見出した Paay らの研究(Paay, Kjeldskov, Skov and O'Hara 2013）など，興味深いものはいくつかある．しかし，日常的な相互行為場面における F 陣形を扱う研究自体，概して少なく，ましてや試着接客場面の F 陣形についての先行研究はない.

試着接客場面の F 陣形を分析していくうえでおそらく最も重要な資源の一つであり，その相互行為を最も特徴づけるものの一つは,「鏡」の存在である．客は，気に留めた衣服を店内であてがったり羽織ったりすることも，試着室内で着替えて試着室内の鏡で確認することも，試着室から出てきて店員や同伴者と確認し合うこともある．ただ，いずれの場合も，客は必ず試着した自分の姿を鏡で確認する．一般的に，鏡は試着室内に設けられているため，試着室内で確認して着替えて出てくることも可能である．しかし，多くの場合，私たちは試着した姿で試着室から出て，店員や同伴者とともに試着した姿を見たり，ひとりで鏡から少し離れて自分の全身を確認したりする．このように，試着室から出て鏡から一定の距離を置いた位置で自分を見るという行為自体が，他者 [1]を志向しているということを強調しておきたい.

鏡の中の像と試着者は，基本的には「同じもの」ではあるが，厳密に言えば，鏡は左右が（そして奥行きが）実物とは逆に映るものであり，また，鏡の角度や店内の照明などの影響によって，実際の試着者そのものとは異なるかたちで見えることも多々ある．客は鏡を介してしか自己像を知りえないが，店員は，客自身を見ることでも鏡の中の客を見ることでも客の試着した姿を確認することができる.

鏡は人間の姿を映し出すモノ（道具）であり，試着接客場面ではそれを利用しながら客と店員とが「道具的 F 陣形」を形成している．もちろん鏡はそれ自体が発話したり行為したりするものではない．しかし，鏡に映る自己像を見て客は衣服を調整したりポーズを取ったりするし，店員もまた客だけでなく鏡の中の客に話しかけることもしばしばであることから, 鏡は試着接客場面の相互行為のなかで明らかに重要な働きをしている「アクター」である [2].

３．試着接客場面におけるＬ字配列・再考

本稿では主に，客と店員が一対一である場合の試着接客場面の相互行為分析をおこなう．本調査研究で使用するのは，20 代女性が衣料品店で買い物する様子を撮影したデータである[3)]．

本章ではまず，試着接客場面に見いだされる，ケンドンが挙げたＦ陣形のうち，Ｌ字配列の事例と見ることのできる客と店員の位置取りを見ていきたい．次の場面は，試着室から出てきたパーカーを試着した客に，店員が「かわいい」と声掛けする場面である．なお，**断片１**および**写真１～３**は，堀田（2023）からの抜粋である．

断片１　客がパーカーを試着し試着室から出てくる場面（客と店員の目線入り）（AV105649.-vol-03　0:01:59~0:02:06）[4)]

01 店員　お疲れ様ですどうでしょうか(.)゜かわい-゜ **写真１**

客の目線　鏡＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

店員の目線 客＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

02 客　　こんな感じ(1.0)(　) **写真２**

客の目線　鏡＿カーテン＿鏡＿＿＿＿＿

店員の目線 カーテン＿＿＿＿鏡＿＿＿＿

03 店員　うん(.)かわい-

客の目線　鏡＿＿＿＿＿＿＿

店員の目線 客＿＿＿＿＿＿＿

04 客　　うん **写真３**

客の目線　鏡＿＿

店員の目線 客＿＿

写真１　店員が「゜かわい-゜」と発話するシーン（AV105649.-vol-03_0:02:01）

写真２　店員の「゜かわい-゜」を受けて，客が「こんな感じ」と発話するシーン（AV105649.-vol-03 0:02:02）

写真３　店員の「かわい-」に，客が「うん」と応答するシーン（AV105649.-vol-03 0:02:06）

写真４　店員が試着室内の鏡を見ながら話すシーン（AV105649.-vol-03_0:02:38）

客は，試着室から出てきて靴を履き，試着室内の鏡が見える位置に立つ．店員は「お疲れ様です」と言いながら客の方に近づき，「゜かわい゜」（01 行目）と褒める（**写真１**）．それに対して，客は「こんな感じ」（02 行目）と，ひとりごとか店員に対して向けられた言葉か分からないようなかたちで反応する（**写真２**）．その間，店員は試着室のカーテンを開けるが，可能な限り客の視界を遮らないように開けているように見え，開けた後は自分が元いた位置――客から見て斜め左前――に戻る．店員は再び「うん(.)かわい-」（03 行目）と客に対して言うが，客は，今度は鏡を見ながら「うん」（04 行目）と明確に同意する（**写真３**）．

写真３を見ると，客は試着室内の鏡に正対する真正面に位置し，店員は試着室内の鏡に自分の姿が映らない，試着室の脇に位置している．ここでの一連の試着接客場面では，この配列がホームポジションとなる（**図１**）．このようなかたち（下半身の向き）で客と店員が相互行為をおこなう場合， L 字配列を成していると言いうる．L 字配列では，参与者の眼前に広がる操作領域が共有されている部分が O 空間となっており，その部分がちょうど L 字の直角部分に相当する．

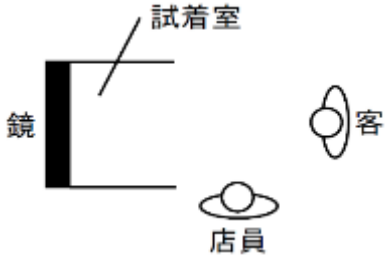

図１　**写真３**以降のホームポジションとしての客・店員・鏡の配列と試着室

ところが，下半身の向きではなく目線の向きを調べてみると，L 字配列とは言い難いことが分かる．このパーカーの試着接客場面は，ホームポジションになってから終了のアイコンタクトをするまで約 97 秒間であったが，そのうち，店員が客および O 空間を見ている秒数は合計で約 50 秒間，試着室内の鏡を見ている秒数は合計で約 43 秒間，その他の場所（客の背面）を見ている秒数は合計で約 4 秒間であった．それに対し，客が店員および O 空間を見ている秒数は合計で 5 秒間，試着室内の鏡を見ている秒数は合計で約 85 秒間，その他の場所（自分の袖口）を見ている秒数は合計で約 7 秒間であった．つまり，店員は客に目線を向けたり（**写真３**），鏡に目線を向けたり（**写真４**）しながら発話しているのに

対し，客は試着中のほとんどの時間，店員およびＯ空間には目線を向けないで鏡を見ており，店員と話す際には身体の向きを変えずに顔だけを店員に向けるのである．

また，これがＬ字配列だとすれば，仮に試着室内に何者かが入り込み鏡の前に立ったとしたら，「何者かが客と店員から成るＬ字配列のＦ陣形のＲ空間に入り込んだ」と説明されるであろうが，実際にそのようなことが起こった場合，客と店員のＦ陣形はいっきに崩れる．つまり，客と店員の操作領域は鏡のところまで拡がっており，かれらと鏡との間の空間がかれらにとってのＯ空間であるはずなのである．

Ｆ陣形が語られる時，つねに複数の人間の（下半身の）位置取りがどのような配列になっているかに焦点化されてきた．しかし，**図１**に示したようなＦ陣形は，たとえば客と店員が立ち話をすることで形成されるＬ字配列ではない．そうではなく，むしろ鏡というもう１つのアクターとの「3 者」によるＦ陣形として考えられるのではないだろうか．客と店員の目線が鏡の方に向いているという様子は，**表２**のように表わすことができるであろう．

読者には，**写真１**から**写真４**までが，日常会話場面ではなく，ほかならぬ試着接客場面として自然に見えるであろう．そのように見せているものは，互いに「対面」（facing）せず目線を合わせていない点や，客がやたらと衣服を触るなどして衣服が自分の一部ではないことを示す「被服性の呈示」（display of clothedness）をおこなっている点であろう（堀田 2023: 34）．このように，かれらの行為と配置とが試着接客場面という状況をつくりあげているとともに，状況もまたかれらの行為と配置をつくりあげており，行為および配置と状況とが相互反映的な（reflective）関係性にあることが分かる．

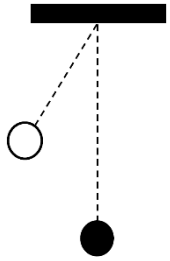

図２　写真３以降の客−店員−鏡の配列（黒丸が客，白丸が店員，黒四角が鏡を表わす）

４　チェックマーク型配列

前章では，試着接客場面に見出せる配列を，ケンドンによるＦ陣形のうち「L 字配列」として説明することに伴う問題点を確認したうえで，鏡を含めて考えると，実は別の配列を成している可能性があることが見えてきた．では，今度はまた別の試着接客場面を通じて，客-店員-鏡の関係性を見ていこうと思う．

４．１　ホームポジション設定までのプロセス

ここで扱う事例は，客が黒いパンツを試着し試着室のカーテンを開けるものの，そこから出てこず，試着室内で店員とともに鏡を見るというケースである．まずはこの場面のトランスクリプトを見ていこう．

断片２　黒のパンツを試着して試着室のカーテンを開ける場面

01 店員：((試着室の外から)) いかがでしたかパンツ:
02 客　：((試着室の中から)) あ:::はい(.)だい-え::っと:着まし(0.4)た-よいしょ-
　　((カーテンが開けられるが試着室内に留まる))
03 店員：お疲れ様でし[た
04 客　：　　[はい
05 店員：はい
06 客　：(　)しょ:
07 店員：結構ぴたっとするでしょ　写真５
08 客　：は:い　写真６
(2.0) 写真７ 写真８
09 店員：ふつ:ですけど:(　)かたちが:カーゴやから::あんまりここのあたりとかも
　　[(　)ですけど::　写真９
10 客　：[あ:::[あ:あ:あ:　写真 10
11 店員：　　[(　　)うんうん
(3.0) ((この間に，店員は棚に置いてあったパーカーを持ってくる))

写真５　店員が「結構ぴたっとするでしょ」と発話するシーン（AV105647.-vol-05_0:00:24）

写真６　客が試着室内の鏡の方を向き直るシーン（AV105647.-vol-05_0:00:25）

写真７　客と店員がともに鏡に向かって左側に移動するシーン（AV105647.-vol-05_0:00:26）

写真８　店員が後戻りし始めるシーン（AV105647.-vol-05_0:00:27）

写真９　店員がカーテンを開けた時と同じ位置に戻るシーン（AV105647.-vol-05_0:00:28）

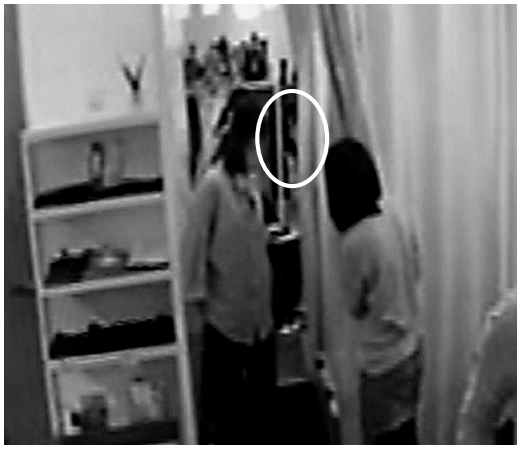

写真 10　客が試着室内の鏡に自分の後姿を映して見ているシーン（AV105647.-vol-05_0:00:34）

客は試着室内で黒いパンツを試着しているがなかなか出てこない[5]．そこで，店員は試着室の外側から声を掛ける（01 行目）．すると，客はそれに反応し，カーテンを開け始める（02 行目）．それを見て，店員はカーテンを開けるのを手伝い，全開になると，客は靴を履こうとしているような少し屈んだ姿勢になる（**写真５**）．そのタイミングで店員は「結構ぴたっとするでしょ」（07 行目）と発話すると同時に，少し右に移動する．客が靴を履いて出てくると思って場所を空けたのであろうか. しかし, 客は試着室の鏡の方に向き直り，外側に出てこず試着室内に留まる（**写真６**）．とはいえ，客はひとりで試着姿を確認したいのではなさそうだ．カーテンは全開であるが，客がカーテンを閉めようとする様子はまったくないことから，客と店員とが協働で，これから客の試着した様子を検討することについての合意があることが分かる．

すると，08 行目の客の「は:い」という同意の後の約 2 秒間の沈黙の間に，客と店員はともに，鏡に向かって左側へと移動し始める（**写真７**）．客は試着室のほぼ中央に立ち，衣服を整え始めるが，店員だけが後戻りし始める（**写真８**）．そして，店員はカーテンを開けた時の位置，すなわち鏡に向かって右側の位置に戻り，客が試着中のパンツについて説明を続ける（09 行目，**写真９**）．この配列がホームポジションとなるのだが，**写真** 10 の円で囲った部分を見ると分かるように，店員の顔が鏡に映る位置であることが確認できる．

ここで注目したいのは，2 人がともに左に移動し始める**写真７**のシーンである．**写真６**では，客は試着室のなかの鏡に対して，右側に寄っているのが分かる．そのため，左に移動して，試着室の中央に移動し，鏡の中央に自分を映そうとしたと言いうるであろう．

そこで，**写真６**と，この試着場面におけるホームポジションとなった**写真９**および**写真** 10 とを見比べてみてほしい．**写真６**の時点では鏡を見る客と店員の位置が鏡に対して縦に重なっており，店員の姿が鏡に映っていない．ところがこの配列だと，店員は客の試着姿を後ろ姿でしか確認のしようがないことになる．つまり，**写真６**の配列では，客がひとり

で鏡を見るのとさして変わらないことになってしまうのである．そうではなく，店員は，客とともに試着姿の確認をするならば，鏡に映らなければならない．だから，店員は自分が映ろうと，そして客は店員を映そうと，左に移動しようとしたのだと考えられる．

ところが，**写真８**のように，客は中央に移動すると衣服を整え始め，ここをホームポジションに定める．すると，店員は後戻りし，**写真５**や**写真６**の時点でいた位置に立つ．こうして，店員も客の試着姿を見ることができ，客も店員の見ている様子を確認することができるようになる．

その後，客は鏡に対して後ろを向いたり横を向いたりしながら試着姿を確認するのだが，**写真 10** における 2 人の目線に注目していただきたい．客は，足および胴体は店員側に向いているが，首から上はねじって鏡の方に向けて，自分の後姿を見ている．美容院とは異なり，手鏡などは置かれていないため，後ろ姿を確認するにはこうするほかない [6]．そして，店員はというと，鏡に映った客の後ろ姿を客とともに見ている．このシーンはごく“普通の”試着接客場面に見えるであろう．

しかし，もし客が鏡で自分の後ろ姿を見ている間に，店員が客の前姿を見ていたら，そのシーンは読者にどのように映るだろうか．おそらくやや奇妙なものに見え，店員のそうした行為（目線）は“盗み見”のようにも見えるのではないだろうか．つまり，店員は客が見ているものと同じものを同じ角度から見ることが規範的である，という可能性が浮上する．実際に，先ほどの**写真３**において，客が鏡を見て，店員が客を見るというホームポジションは，客が鏡を通して見ている自分の前姿とほぼ同じ前姿を，店員が直接的に見ているが，それは，客が見ているものと店員が見ているものとが（ほぼ）同じものだからである（ただし，2 人が見ているものは，左右が逆転して見えていることは言うまでもない）．

このように，鏡を見て試着姿を確認する際，客と店員とは互いが鏡に映り互いの顔を確認できる配列になるよう協働で調整し，ホームポジションを設定する．しかもその際，2 人が同じものを同じ角度で見ることが規範的になる．

その点では，前章で見た L 字配列のような位置取りの場合，店員は鏡に自分が映らなくとも，客と同じものを同じ角度で見ることができる．しかし，本章で見たように，それが不可能な場合には，店員は客の斜め後ろから，自らも鏡に映ることで鏡を通して――あるいは鏡の中で――相互行為をおこなうのである．ただし，あくまでも鏡に対してやや斜めに相対し（**図３**を参照），自分の身体が映り込む身体の分量をできるだけ少なくするのである．

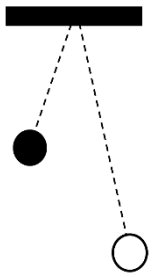

図３　写真９から**写真 14** の客–店員–鏡の配列（黒丸が客，白丸が店員，黒四角が鏡を表わす）

４．２　チェックマーク型配列

先ほどのデータの続きを見ていきながら，客と店員の F 陣形について考えていきたい．

断片３　黒のパンツを試着中にパーカーをあてがい組み合わせを確認する場面（**断片２**の続き，一部重複）

09 店員：ふつ:ですけど:(　)かたちが:カーゴやから::あんまりここのあたりとかも
　　[(　)ですけど::
10 客　：[あ::::[あ:あ:あ:
11 店員：　　[(　　)うんうん
（3.0）((この間に，店員は棚に置いてあったパーカーを持ってくる)) 写真 11
12 店員：これとか(　　)　写真 12
13 客　：あ:あ:あ:
14 店員：(　　)
15 客　：あ(.)いいですね:　写真 13
16 店員：で下ショートパンツ（　　）
17 客　：あ::これはかわいいかも(0.4)　写真 14
　　あ(.)こんな感じだとまた[(.)違いますね::
18 店員：　　[そうですね:違いますよね::

写真 11　店員が“何か”に目線を向けるシーン（AV105647.-vol-05_0:00:37）

写真 12　店員が客の身体にパーカーをあてがうシーン（AV105647.-vol-05_0:00:43）

写真 13　客が自分の身体にパーカーをあてがい，鏡を見るシーン（AV105647.-vol-05_0:00:46）

写真 14　**写真 13** から約 10 秒後のシーン（AV105647.-vol-05_0:00:56）

客が黒いパンツを試着した自分の姿を鏡に映し，後ろや横から見ている最中，店員がふいに店内の“何か”に目線を向ける（**写真 11**）．それは，いま試着中のパンツの前に試着したパーカーであり，前章のデータに登場したものである [7]．そのパーカーを持ってきて客にあてがっているのが**写真 12** である．ほんの 1 秒ほどのシーンだが，首から下の胴体（および，足）は店員の方に向いているが，首から上は鏡の方を向いており，「身体ねじり」になっている．その後，店員はパーカーを客に渡し，客自身がパーカーをあてがいながら鏡を見始める（**写真 13**）．この時，やはり店員は鏡に映っており，実際に鏡の中で客と店員が会話をおこなっている（13～18 行目）．

前節で確認したように，客は当初，鏡に向かってやや右側に位置していたが，中央に移動していた．ところが，**写真 10** で後ろ姿を見始めたあたりの時点から，やや左側に位置するようになる（**写真 11**～**写真 13** 参照）．そして，客がパーカーを自らあてがって鏡を見るようになってからは，**写真 13** の配列がホームポジションとなる（この配列が約 10 秒間続く．**写真 14** も参照）．この配列では，客の身体が鏡に対してやや斜めに対しているのも分かるだろう．このパーカーを確認後，店員に返すことを予期して，「ねじりを最小限に抑える」（Schegloff 1998）ために，この位置と角度になっているように見える．あるいは，自分の身体が映り込むにしても，それを斜めにすることで，関心の焦点が客の身体からずれないためかもしれない．そして，店員も先ほどからと同様に，右のカーテンに身体の一部が隠れるようにして，鏡に対して斜めに相対しており，鏡にはできるだけ客の身体と衣服のみが映るように行為をデザインしていることがうかがえる．

さて，この時の客と店員の位置関係は，あたかも鏡を頂点とするチェックマーク（確認の意で用いる「✓」の記号）のようになっている．こうした位置関係を「チェックマーク型配列」（checkmarked arrangement）と名づけたい．あくまでもチェックマーク型であって，V 字型ではない．なぜなら，二者はけっして鏡に対して縦並びにならないだけでなく，横並びにもならないからである．前章および前節で挙げた**図２**と**図３**も「チェックマーク型配列」である．この配列は，客と店員が鏡からもっと離れている場合（**写真 15** および**図４**）や，客に同伴者がいる客-同伴者-店員の場合にも見出せる（**写真 16** および**図５**）．**写真 16** および**図５**では，客の両斜め後ろに同伴者と店員とが位置しているが，客と友人，客と店

写真 15　チェックマーク型配列の例
(1)（AV105647.-vol-03_0:00:02）

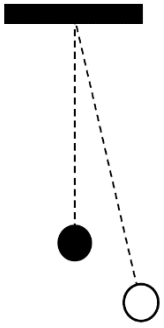

図４　**写真 15** の
客−店員−鏡の配列

写真 16　チェックマーク型配列の例 (2)（AV110851.-vol-08_0:03:27）[8)]

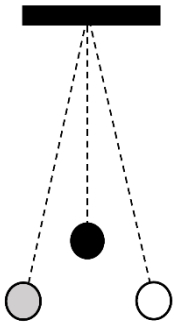

図５　**写真** 16 の客−店員−同伴者−鏡の配列（灰色丸は客の同伴者）

員はやはりチェックマーク型になっていることが確認できる．

このチェックマーク型配列は「道具的Ｆ陣形」の一つであると言えそうであるが，マクニール自身が「道具的Ｆ陣形」それ自体については詳しく述べていないため，このような鏡を含んだ相互行為場面が考慮されているかどうかは分からない．だが，試着接客場面における参与者たちの目線の先は鏡であるゆえに，マクニールが挙げている事例とは異なると考えられる点がある．ひとつは，マクニールの「道具的Ｆ陣形」では，参与者は事物を見たり参与者を見たりするが，チェックマーク型配列の場合，参与者は事物（鏡）を見たり参与者（客）を見たりするのではなく，事物（鏡）に参与者（客）を見るという点である．表面につやのある鏡という物体を見るわけではないのだ．したがって，鏡はたんに相互行為の道具としてそこにあるのではなく，参与者間の相互行為に「埋め込まれている」と言いうる．もうひとつは，事物（鏡）を見ている者たちの様子や反応が同時に見えるという点である．店員は鏡を見ないこともあるが（第 3 章の**写真３**を参照），それでも必ず客が見ているもの（試着姿）と同じものを同じ時に見ており，しかも見ている様子を互いに見ることもできる．試着接客場面ではこのことによって協働性が達成されている．

ケンドン以降，新たに見出されてきたＦ陣形は他にもある．Paay ら（Paay et al. 2013）は，YouTube の料理動画を分析するなかで，(a) 幅広 V 字配列（wide V-shaped），(b) スプーニング配列（Spooning），(c) Z 字配列（Z-shaped），(d) 逆 L 字配列（reverse L-shaped）の 4 つを挙げている．(a) 幅広 V 字配列は，隣接配列と L 字配列との連続性があるが，それらとは異なり，各々が前を向いて各々の作業をしながら身体をやや接触させる点に特徴がある．(b) スプーニング配列は，背後から料理を手伝ったり何をしているのか見たりする時に生じ，各々が同じ方向を向き面前の同じ空間を共有する点に特徴がある．(c) Z 字配列は 2 人が隣接しているが互いに逆の方向を向くというもの，(d) 逆 L 字配列は，台所のレイアウト上，逆 L 字の方向を向いて作業をするというものである（**図６**参照）．

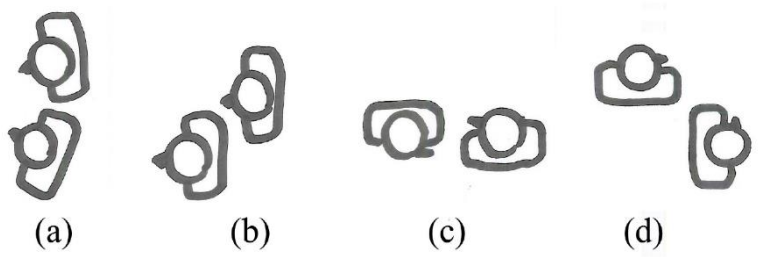

図６　Paay らが示す(a) 幅広 V 字配列，(b) スプーニング配列（Spooning），(c) Z 字配列，(d) 逆 L 字配列（Paay et.al 2013: 47）

このうち，(b) スプーニング配列は，試着接客場面に見出したチェックマーク型配列に類似している（**図７**）．Paay らが「スプーニング」（spooning）という言葉で表現しているのは，スプーンで料理をすくって味見する（させる）位置関係という意味でも，親密な関係性にある者同士がじゃれ合う位置関係という意味でもあると考えられ，身体的な接触を伴うことも密着することもある．もちろん試着接客場面では客の試着中の衣服を整える以外のかたちで客の身体に接触することはまずないが，人間の位置取りだけに着目すれば，料理場面におけるスプーニング配列と試着接客場面におけるチェックマーク型配列は類似している．ただし，スプーニング配列では，互いの表情などの反応は分からないし，分かる必要はないのに対し，チェックマーク型配列では，互いの表情などの反応が分かることが重要なのである．

図７　Paay らが示す Spooning の例（Paay et.al 2013: 49）

ただし，試着接客場面の場合にこの配列が可能なのは，あくまでもそこに鏡があるからであり，もし鏡がない状況で客のすぐ背後に店員が位置取っていたとしたら，それは試着接客場面として非常に奇妙なものに見える（たとえば，**写真９**や**写真** 10 の客と店員の配列で，そこに鏡がなかったら，と考えてみてほしい）．

これまで，F 陣形について考える際は，人間の位置取りにのみ着目されてきた．しかし，ケンドンのオリジナルの配列であれ，Paay らの見出した新たな配列であれ，その配列を規定する要因は，場面に対する当事者たちの意味付与であり（料理場面なのか試着接客場面なのか），それに基づくかれらの行動であり（料理をするのか，試着した姿を鏡に映し確認するのか），かれらの関係性であり（親密な関係性にあるのか否か），物理的および環境的な諸条件である（作業台や鏡はどこに設置されているか）．したがって，F 陣形を考える際，モノを含めて考える必要があるのだ．

チェックマーク型配列は鏡があるからこその配列であり，鏡を含めた配列である．その

意味では，参与者たちに影響・作用を及ぼす「アクター」と見なすことはけっして不自然なことではないであろう．

５．鏡をアクターとして捉える

鏡をアクターとして考えＦ陣形のなかに位置づけるためには，まずアクターネットワーク理論のなかで身体がどのようなものとして考えられているかを見ておく必要があると思われる．そこで，本章ではアクターネットワーク理論における身体についての考え方を概観したうえで，鏡をアクターとしてとらえることの意義について考えていきたい．

アクターネットワーク理論を特徴づける最大のポイントの一つでありもっとも物議を醸してきたのは，B.ラトゥール自身が『社会的なものを組み直す』のなかで「他のすべての不確定性の源泉」（Latour 2005=2019: 75）であると述べる，第三の不確定性の発生源，すなわち「モノにもエージェンシーがある」という点である．「エージェンシー」（agency）とは，「行為作用」と邦訳されることが多いが，「何かをするものとして，常に報告に現れる」（Latour 2005=2019: 101）性質のこと，言い換えれば，何らかの行為および作用（action）をもたらすことのできる性質のことである．

しかし，現象学の立場からは「モノが自ら何かを志向するようなことはない」と，アクターネットワーク理論の考え方に異論を唱える者もいる（Crossley 2010）．たしかに，モノは自ら動くことはなく，あくまでも人間によって動かされるのみである．この点について，ラトゥールは注のなかで「現象学者は，エージェンシーが人間から生まれることを過度に強調する」ゆえに，ANT と現象学の「関心はかけ離れたままである」と述べている（Latour 2005=2019: 117）．それはとりわけ，現象学における「指向性／志向性」（intentionality）の概念が，エージェンシーの概念と相容れないと考えられていることによる．だが，ラトゥールは「エージェンシーを「志向性をもたない」存在にまで広げなければならない」（Latour 2005=2019: 117）と述べる．なぜなら，「私たちのコントロールの及ばない私たち以外のエージェンシーが私たちにあれこれさせている」（Latour 2005=2019: 96）からであり，私たちの身体を語る際に，人工／自然といった区分がもはや意味を為さないことも含んでいる．今でこそ人体とコンピュータとの接続やポスト・ヒューマンの議論もあるが，そもそも人間ははじめから単体で存在したことなどない．モノを食べ，身につけ，身体化（embodiment）し，身体性（embodiment）を獲得してきた．したがって，人間の身体に関して，どこまでが自然でどこまでが人工かといった問いを向けること自体，ほとんど意味を為さないのではないかとさえ言いうるのである．

事実，B.ラトゥールによる身体の定義からは，こうした身体観が垣間見える．彼は ‘Body & Society’ に寄稿した「身体についていかに語るか――社会科学の規範的次元」（原題：“How to talk about the body?: The Normative Dimension of Science Studies”）のなかで，身体について，「より多くの要素から影響を受けるようになるにつれてますます記述可能になるインターフェースである」（Latour 2004: 206，強調は原著）と定義づけている．

身体に影響を及ぼし動かすもの．それは他者でもあるし，食物や装飾品，あるいは道具などのモノでもある．身体はそれらによって影響を受けることで，感覚的で有能なものとなる．そのことが最もよく理解できる例として，ここでは，ラトゥールが挙げている「匂いキット」に関する議論およびそのエッセンスを見ておきたい．

香水産業では匂いを嗅ぎ分ける敏感な「鼻」あるいは嗅覚が必要であるが，そうした部位あるいは感覚を獲得するために使用されるのが「匂いキット」（*malettes à odeurs*）である．はじめはコントラストの強い香りから始め，徐々にコントラストの弱い香りへと移行し，最終的には「（豊かに分化した匂いのある）世界に生きることを可能にする鼻を持つ」（Latour 2004: 207）に至るという．

身体はモノによって今あるところの身体になる．たとえば，「匂いキット」然り，近年のパワードスーツ然り．また，より一般的には眼鏡・コンタクトレンズや自転車や自動車などのモビリティについても同じことが言えるであろう．つまり，身体はつねにモノによって変容させられ，性質や能力を獲得することで，新たな世界の経験の仕方を獲得するのである．このことをラトゥールは「影響を受けるにつれて記述可能になるインターフェース」と表現しているのである．

ただし，重要なことは，「匂いキット」は，主体としての身体が一方にあり，客体としての世界がもう一方にあり，その両者の間を接続する「中間項」（intermediary）ではない，ということである．「中間項」は，「意味や力をそのまま移送（トランスポート）する（別のところに運ぶ）ものである」（Latour 2005=2019: 74）．もしこの定義および主客モデルに従うと，身体が捉えた世界は，実在する世界と一致しているのか否かが問題となるだろう．言い換えれば，主体が客体を捉える際の正確さが問われることになる．それとともに，身体と世界とをすでにそこにあるものとして捉えていることになることから，主体もしくは客体のどちらかに軍配を上げる考え方――主客二元論――に陥ってしまう．そして，中間項は，主体／客体のいずれにも属さないものであることから，接続を達成すれば消えてしまうのである（Latour 2004: 208）．

しかし実際には，「匂いキット」は消えてなくなるわけではなく，身体の一部となるとともに，世界の一部にもなる．したがって，「匂いキット」は身体と世界をともに変容しているのであり，たんに両者を接続する以上の何かであると言える．こうした性質をもつものを，ラトゥールは「媒介子」（mediator）と呼ぶ．「媒介子」は，次のように説明されている．

> 媒介子は，きっかりひとつのものとみなすことはできない．媒介子は，ひとつのものとされるかもしれないし，物の数に入らなくなるかもしれないし，かなりの数のものとされるかもしれないし，無数のものとされるかもしれない．インプットからアプトプットをうまく予測することは決してできない．その都度，媒介子の特性が考慮されなければならない．媒介子は，自らが運ぶとされる意味や要素を変換し，翻訳し，ねじり，手渡しする．（Latour 2005=2019: 74）

たとえば,「匂いキット」というモノだけでなく，それを使うための講習会やその講師も「媒介子」に含まれよう．これらが，一定の匂いを嗅ぎ分ける身体（鼻）をつくると同時に，区分されうる匂いの世界もつくるのである．

また，同じモノが「中間項」である場合も「媒介子」である場合もある．その違いについて，次のように説明されている．

> 正常に作動するコンピュータは複合的な中間項の格好の例と見なせる一方で，日常の会話は，恐ろしく複雑な媒介子の連鎖になることもあり，そこでは，感情や意見，態度が至るところで枝分かれする．しかし，コンピュータは，壊れてしまえば，恐ろしく複雑な媒介子に一変するだろう．他方で，学会で開かれる非常に高度なパネルディスカッションが，どこかほかでなされた決定を追認するだけであるならば，まったくもって予測可能で問題をはらまない中間項になる．（Latour 2005=2019: 74-5）

「中間項」はそこにあることが意識されないほどに主体と世界とをつなぐが，双方に大きな変容をもたらすことはない．しかし,「媒介子」はその存在によって主体にも世界にも変容をもたらす．

さて，試着場面における鏡は，客の身体と衣服をつなぐ「媒介子」である．私たちは「試着したらイメージと違った」という経験をすることがある．衣服を目にした時に喚起されるイメージをもって，それを自己の身体と鏡を通してつないでみた結果，そのイメージと自己の身体とが不適合であったということである．しかし，鏡は衣服と客の身体とをただつなぐのではない．客は鏡を見ながら自分に合った着方を模索し，ポーズを取ったり角度を変えたりして，衣服のイメージと自己の身体とを適合させようとする．その一方で，自分の身体によって変わってしまった衣服のイメージを受け入れ，イメージを書き換えることもする．

それだけではない．客はふと目に入った店内の別の商品に心奪われ，店員と会話している最中，心ここにあらずになることもある．また，客は鏡を見ながら店員からの提案を受け，その衣服のイメージと自己の身体とを適合させようとしたり，イメージを書き換えたりすることもある．たとえば，店員は 1 着のパーカーに対して「袖を折り曲げる」「下から襟を出す」などというように衣服それ自体の変形を提案するだけでなく,「ピタピタのパンツと合わせる」「ショートパンツと併せて裾を少し上げる」などというように，他のアイテムとの組み合わせも提案し（堀田 2021），客もまた，いまここに存在しないアイテムとの組み合わせを想像しながら「かわいい」「いいですね」などと言うこともある（堀田 2023）．

つまり，試着接客場面においては，鏡だけでなく別の商品，店員，そして店員が客に対しておこなう提案も,「媒介子」というアクターとしてインタラクションの連関を成していると考えられる．このことは，F 陣形を考えるうえで，モノの位置という物理的環境だけ

でなく，店員の存在やその提案という非物質的存在までも無視できないことを表わしている．

６．おわりに

本稿では，試着接客場面から，客と店員が鏡を含んで形成する「チェックマーク型配列」を見出した．必ずしも客が鏡にもっとも近い場所に位置するとは限らないし，鏡に向かって中央に位置するとも限らないが，客と店員は縦並びにも横並びにもならないという配列である．この点は，Paay らが料理場面に見出した「V 字配列」とは異なる．

また，「チェックマーク型配列」は，同じく Paay らが見出した「スプーニング配列」と，人間の配列だけに着目すればかなり類似している．だが，大きな違いは，「チェックマーク型配列」は参与者たちの指向性が鏡の方を向いている点にあり，鏡の存在をその配列内に描かなければいったい何をしているのか分からないものになってしまうのである．その意味で，この F 陣形は鏡があるからこそ可能になっており，鏡を含んでいる．そして，参与者たちは鏡を通じて，互いの様子や反応を同時に見ているのである．

「チェックマーク型配列」自体が新たな発見であると言えるだけなく，このように――必ずしも鏡だけではなく――事物を含んだ F 陣形という考え方も，これまでの F 陣形研究では見出されていなかったものである．「道具的 F 陣形」の観点から，参与者が作品や画面などの事物を見ながら相互行為する場面についての研究も進んでいる．だが，そこでの事物はあくまでも“不動・不変のもの”として扱われてきたきらいがある．もちろん，事物はひとりでに動くことはない．しかし，事物があるからこそ，私たちはそれを道具として利用したり，逆に障害物として避けたりして F 陣形を形成する．事物は，状況に応じて――そしてその状況もまた私たちが作り出してはいるのだが――私たちに利用させたり避けさせたりすると考えれば，私たちが対面し協働する体勢としての F 陣形は，事物が形成していると言っても過言ではないのではないか．だからこそ，F 陣形研究において，事物や物理的環境を含んだ考察が重要だと考えるのである．試着接客場面における鏡の存在は，そのことに気づかせてくれた．

身体を装うことに関わる相互行為場面を考えていくうえで，鏡の存在およびその位置は考慮に入れないわけにはいかず，したがって鏡を含む F 陣形の考察は不可欠である．客は，鏡で自己像を確認することで，自己の身体と衣服のイメージとの適合をはかる．陳列されている状態では気に入った衣服が，「着てみたらイメージと違った」というのはよくある経験だが，試着とは，衣服のイメージと自己の身体との適合性を確かめる行為である．だが，試着行為のなかで，客は単純に衣服のイメージが自分の身体に合うか否かを確認するだけではなく，自分の身体に合うように衣服を変形し，イメージとの調整をはかる．

その際，店員は客と一緒に試着姿を確認する．必ずしもつねに鏡を介するわけではない．しかし，客が試着した姿を店員と客とが一緒に見ること，すなわち同じものを同じ時に見ることが重要である．なぜなら，同じもの（客の試着姿）を見て発せられるコメントや提

案を互いに確認し合い，同じ感覚のなかにあることを確認する必要があるからだ．

鏡は，通りすがりに自分の姿を確認する程度で見る場合には「中間項」であると言えるだろうが，試着接客場面では「媒介子」である．鏡を介して，客は衣服に合う動きをしてみたり「被服性の呈示」をおこなったりして身体を変えるいっぽうで，衣服のイメージもまた，当初思ったものと同じままであったり変化していったりするであろう．いや，鏡だけではない．同じように衣服のイメージと客の身体の双方を変化させるという点では，店員という存在やそのコメントや提案も同じである．つまり，こうした複数の有形／無形のアクターが試着接客場面，そしてそのＦ陣形を形成しているのである．

鏡を含む場面における相互行為およびＦ陣形についての研究は，出発点に立った段階にすぎない．また，本稿でおこなったＦ陣形研究およびエスノメソドロジーの考え方と，アクターネットワーク理論との接続は，いまだ不十分なものである．だが，装いという社会的活動を考えていくうえで，この両作業は重要なものとなるであろう．

［注］

1) 他者との間には，通常，「個体距離」（Hall 1966=1970）以上の間隔があり，一定の距離以上離れている．そのため，鏡から一定の距離を置いた位置で自分を見るということは，他者の目線で自己像を確認するということでもあると考えられる．つまり，同伴者のような「重要な他者」だけでなく，「一般化された他者」（Mead 1934=1995）をも志向している．

2) なぜ鏡が「アクター」だと言えるかは，後述する．

3) 本稿で扱うデータは，2010 年代に日本国内で撮影させていただいたものであり，目隠しをするなどして本人を特定できないようにすることで公開する許可を得ている．画像処理はあくまでも匿名化の目的でおこなわれており，本稿の主張に関わる加工や改変などは一切おこなっていない．そのことを示すため，すべての断片や写真には，筆者が所有するデータセットのなかのどこにあるものなのかを明記してある．

4) 本稿で使用するトランスクリプト記号は以下の通りである．

-	直前の言葉が途切れている
:	直前の言葉が伸ばされている
[	同時発話の始まり
° °	囲まれた言葉が小さな声で発せられている
( )	聞き取れないが何か言葉が発せられている
(.)	ごくわずかな間合いがある
(数字)	数字の秒数だけ沈黙がある
(( ))	筆者による補足

5) 客はこの試着の前にパーカーを試着しているが，パーカーの場合，客は 11:07:44 に試着室に入り，11:09:17 に出てきて，ちょうどその時間にスタッフ控室から出てきた店員が近づいてくる．その間，およそ 1 分半である．しかし，この黒いパンツの試着場面では，

客は 11:14:47 に試着室に入っているがなかなか出てこず, 入室から約 2 分後の 11:16:42 に店員が「いかがですか」と試着室の外側から声掛けをしている．なお，店員が腕時計などを見ている様子は確認できない．店員は「(この客は) 脱ぎ着には約 1 分半の時間を要する」ということを身体化している，と言っては過言だろうか.

6)「鏡」を用いた接客という点はスタイリング場面にも共通する (Oshima and Streeck 2015) が，そこでは手鏡などを使って合わせ鏡をすることが異なる．客が後ろ姿を見る際，試着接客場面では，「身体ねじり」で見ることが可能だが，スタイリング場面では，客は着座の状態でサービスを受けるためそれができない.

7) パーカーを試着した際，店員はそれに「ピタピタのパンツ」を合わせると「かわいい」とアドバイスをしている．その「ピタピタのパンツ」に相当するのが，いま試着中のパンツであると考えられる. パーカーは, **写真** 11 の左下に写っている陳列棚に置いてあった.

8) この写真には，客，同伴者，店員のほかに，その背後に撮影クルーが 2 名写り込んでいる.

［参考文献］

Crossley, N., 2010, *Towards Relational Sociology*, Routledge.

Den, Yasuharu, 2018, "F-formation and social context: How spatial orientation of participants' bodies is organized in the vast field", Proc. LREC2018 Workshop: LB-IRL2018 and MMC2018 Joint Workshop, 35-9.

Goffman, E., 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis: Bobbs-Merrill.（佐藤毅・折橋徹彦訳, 1985, 『出会い――相互行為の社会学』誠信書房.）

Hall, E., 1966, *The Hidden Dimension,* Doubleday.（日高敏隆・佐藤信行訳，1970,『かくれた次元』みすず書房.）

堀田裕子, 2021,「「試着のエスノメソドロジー」の可能性――何がどのように試着されるのか」『現象と秩序』14: 1-20.

堀田裕子, 2023,「鏡に映る自分を褒めることはいかにして可能か――試着接客場面における「かわいい」をめぐる相互行為分析」『現象と秩序』18: 23-46.

Kendon, A., 1990, *Conducting Interaction: Patterns of Behavior in Focused Encounters*, Cambridge University Press.

小林優・氷見千恵子・仲地一世・片上大輔, 2012,「F 陣形に基づくインタラクティブデジタルサイネージ」日本知能情報ファジィ学会『ファジィシステムシンポジウム講演論文集』28(0): 590-5.

Latour, B., 2004, "How to talk about the body?: The Normative Dimension of Science Studies", *Body and Society* 10(2-3): 205-29.

Latour, B., 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford University Press.（伊藤嘉高訳, 2019, 『社会学なものを組み直す――アクターネットワ

ーク理論入門』法政大学出版局.）

牧野遼作・古山宣洋・坊農真弓, 2015, 「フィールドにおける語り分析のための身体の空間陣形――科学コミュニケーターの展示物解説行動における立ち位置の分析」『Cognitive Studies』22(1): 53-68.

McNeill, D., 2005, “Gesture, Gaze, and Ground, *Lecture Notes in Computer Science*. Springer-Verlag, 1-14.

Mead, G.H., 1934, *Mind, Self and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Univ. of Chicago Press. （稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 1973, 『精神・自我・社会』青木書店. 河村望訳, 1995, 『精神・自我・社会』デューイ＝ミード著作集 6, 人間の科学社.）

Oshima, Sae. & Streeck, Jürgen., 2015, “Coordinating talk and practical action: The case of hair salon service assessments”, *Pragmatics and Society* 6(4), 538-64.

Paay, J., Kjeldskov, J., Skov, M. B. and O’Hara, K., 2013, “F-Formations in Cooking Together: A Digital Ethnography Using YouTube”, P. Kotzé et al. (Eds.): *INTERACT 2013*, Part IV, LNCS 8120, 37–54.

Schegloff, E. A., 1998, “Body Torque”, *Social Research,* 65(3): 535‐96. （http://www.jstor.org/stable/40971262）

塚本壮俊・角所考・飯山将晃・西口敏司, 2017,「障害物を含むオフィス空間内でのインタラクション対象の推定」『認知科学』: 1-2.

Yousuf, M.A., Kobayashi, Y., Kuno, Y., Yamazaki, K. and Yamazaki A., 2012, “A Mobile Guide Robot Capable of Establishing Appropriate Spatial Formations”, *IEEJ Transactions on Electronics*, *Information and Systems*, Vol.133 No.1: 28-39.

＊＊＊

【編集後記】『現象と秩序』第 19 号をお届けします．

今号は巻頭に，気鋭の社会学者である岡村逸郎氏によるテレビアニメ作品論を配し，本誌の読者数の飛躍的増大を狙っています．どうか，周囲のアニメ研究者や文化社会学研究者にお勧めください．さらに，内容を読んで頂くとわかるように，青年論や死の社会学としての側面も持った論考になっています．この多面性こそは，学際誌としての本誌の特徴を上手に活かした議論の仕方になっていると思います．

第 2 論文は，村中淑子氏による色彩語研究論文です．出だしが魅力的です．村山由佳のエッセイ（『命とられるわけじゃない』）の中での「チョコレート色」の使われ方から話題を立ち上げて，これまでほとんど研究されてこなかった＜外来語名詞＋色＞に関するチャレンジングな議論を展開しています．言語学に関心がある読者だけでなく，社会のなかで様々な意味が相互にどのようにネットワークを形成しているのか，ということに関心を持っている（広義の）社会学者にも興味深い論考になっています．

第 3 論文は，身体論を専門に研究している堀田裕子氏による，これもチャレンジングな議論です．「鏡」は，人間ではないにもかかわらず「試着場面」においては，「試着者」と「店員」の両方が「鏡」に写っている客の画像を中核的関心対象として扱っています．堀田氏は「鏡はアクターだ」とまでいいます．その主張の適否をどうぞ吟味して下さい．

第 4 論文は，樫田による「暗号の社会学」です．今回扱っているのは「公務員試験問題の“教養試験”の中の“判断推理”という一群の問題群の中の“暗号問題”」ですが，じつは人間は「暗号」をめぐって社会的期待と期待の摺り合わせをしています．そのような人間ネットワークの在り方の中に公務員試験の「暗号」もあるのだ，という大きな論考の一部として，今回の論考は構想されています．次稿も請うご期待，です．（Y.K.）

＊＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2023 年度）
編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）
編集委員：樫田美雄（摂南大学），中塚朋子（就実大学），加戸友佳子（摂南大学）
編集協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第 19 号　　2023 年　10 月 31 日発行

発行所　〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17-8
摂南大学　現代社会学部　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室
電話・FAX）072-800-5389（樫田研），e-mail：　kashida.yoshio@nifty.ne.jp
PRINT ISSN　：2188-9848
ONLINE ISSN　：2188-9856
http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html

＊＊＊